

平成23年度八重山群島病害虫発生予報第11号(2月予報)

I 2月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	20	30	20
平年並	40	30	40
低い(少ない)	40	40	40

(平成24年1月27日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
八重山群島(石垣島)	19.1	21.6	16.9	139.4	82.1

(沖縄気象台発表・統計期間1981~2010・資料年数30年)

II 2月の発生予報および防除上の注意事項

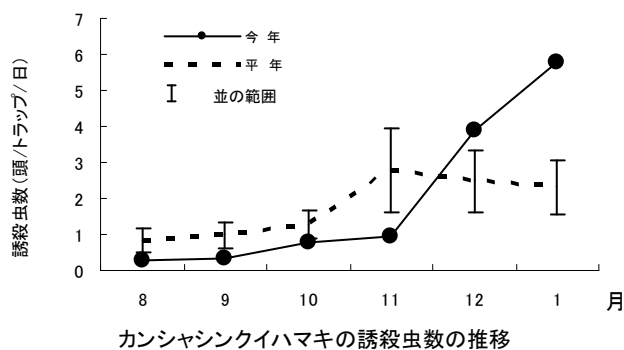
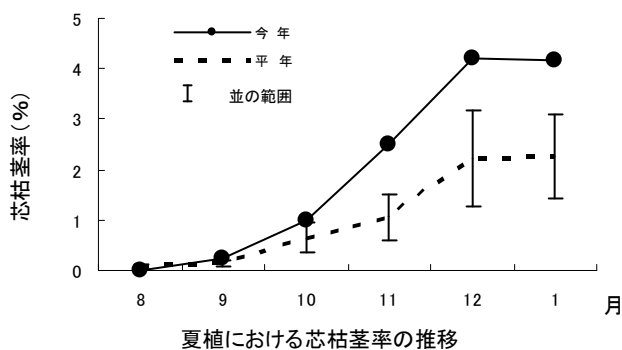
1 さとうきび

(1) メイチュウ類

発生程度 : やや多

予報の根拠

- 1月下旬の調査の結果、夏植圃場での芯枯茎率は4.2%(前年2.1%、平年2.6%)と平年よりやや高かった。
- 1月のカンシャシクイハマキ合成性フェロモンによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は5.8頭(前年2.6頭、平年2.3頭)と平年より多かった。



<防除上注意すべき事項>

- ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- 夏植えの培土時や春植えの植付時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を施用する。
- 平成23年度病害虫発生予察注意報第2号(平成23年12月1日付)参照。

○ 収穫後圃場におけるカンシャコバネナガカメムシの防除対策

- 収穫の際に地上に落下した卵や越冬成虫は地表や株元に残存し、収穫後の株から伸びた幼茎などで生育する。
- 卵の死亡率を高め、第1世代の発生を抑制するため、収穫後は全面および畝間の耕耘を速やかに行う。

2 マンゴー

- 炭疽病の防除対策
 - a 1月下旬の調査の結果、発病葉率は1.2%(前年0%、平年5.4%)と平年よりやや低かった。
 - b 本病の病原菌は花芽、花序、葉などに潜在感染していることが知られており、収穫果実への被害軽減のため、今後袋がけ前までの防除対策が重要である。
 - c 罹病した新梢、残渣は速やかに施設外に持ち出し処分する。
 - d 花芽分化～開花期には、予防効果のある薬剤を選定し、定期防除に努める。
- チャノキイロアザミウマの防除対策
 - a 1月下旬の調査の結果、葉当たり虫数は0頭(前年0.1頭未満、平年0.1頭)であった。
 - b 開花期以降は本種が増加する可能性があるため、早期発見、早期防除に努める。
 - c 混合花の新葉や不用な新鞘は本種の発生を助長するので、早い時期に摘葉する。
 - d 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
 - e 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

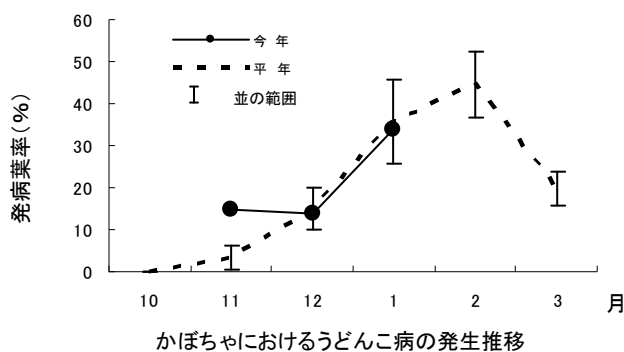
3 かぼちゃ

(1) うどんこ病

発生程度 : 並

予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病葉率は33.8%(前年4.3%、平年35.6%)と平年並であった。



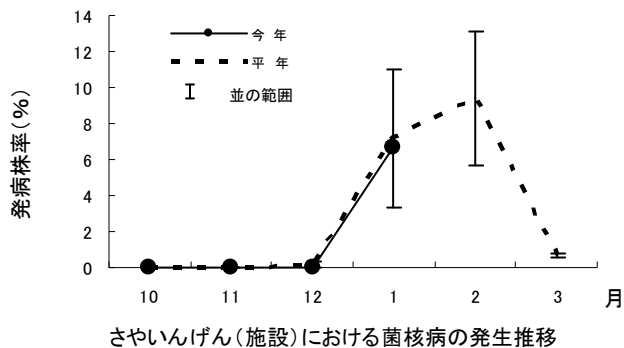
<防除上注意すべき事項>

- a 株元の老葉を除去し、透光通風をよくする。
- b 着果期以降は本病の発生が増加しやすいので、予防散布を行う。
- c 着果後は防除を徹底し、収穫時までできるだけ多くの健全葉を確保する。
- d 多発すると防除が困難になるので、葉裏をよく観察し、早期発見・早期防除に努める。

4 さやいんげん(施設)

- (1) 菌核病
発生程度 : 並
予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病株率は6.7%(前年15.8%、平年7.2%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- 発病部位は、菌核が形成される前に除去し、ビニール袋に入れるなどして施設外へ持ち出し処分する。
- 多湿時に発生しやすいので、老葉は取り除き透光通風を良くする。
- 例年発生時期に当たるので、予防防除に努める。
- 平成23年度病害虫発生予察技術情報第9号(平成24年2月1日付)参照。